

均水量が保たれるよう配慮された。この水利慣行は、明治以降もずっと続いた。用水内では、下流域が本来は不利な条件にあるにもかかわらず比較的優遇されていた。下流域に幕領が集中し、また旧見沼溜井の既存水利権を守らねばならぬ背景があったためであると思われる。しかし、明治時代となり代用水路が民営化されるに伴い、この上流と下流の立場が逆転する。用水費の負担金にも大幅な格差ができ、下流域の発言力は弱まった。戦後になってようやく格差がなくなり、水利が民主化した。

明治30年代から見沼代用水域では陸田が発達し、用水の盗水が相次いだ。水不足は他用水に比べると深刻ではなく局地的な対処にとどまった。これも、見沼代用水が歴史的に優遇された水量豊富な用水であったからである。

見沼田圃は、見沼代用水の下流域にあたり首都圏20～35kmに位置しながら、1200haにも及ぶ緑の空間となっている。これは、見沼代用水から直接きれいな水を取水できたことによるところが大きい。見沼溜井干拓後、約2世紀にわたって水田単作地として利用されてきたが、ここ10余年間で、土地利用が全く変貌してしまった。従来は蓄力利用もできない湿田で摘み田が行われ、生産性も低かった。昭和40年代後半から土地改良事業が実施され、周辺台地の農地が遺棄していくなかで、見沼田圃は農地の中心としての役割を果たすように

なり、今では台地から押し出された野菜、植木類の栽培が中心となっている。

しかし、見沼田圃は、成立課程からみても各農業集落からの出作地帯として位置づけられ、各農家の所有面積も平均約0.4haと少ない。しかも、各場所に分散しており、農地は連続しているが、各地権者の思惑は農地一筆ごとに分散しており、統一意見が生まれにくい。耕作放棄地も多く、営農環境を悪化させる要因となっている。現在、植木畑が増加しているが、植木は不景気で、単なる農地保全の手段としての利用でしかなく、潜在的な不耕作地はかなりあるように思われる。

こうしたなかで、見沼田圃の農地転用を規制してきた見沼三原則に対する反発が強くなり、画一的な規制も限界に達したようだ。今まで遊水機能確保が最優先で農業が犠牲となることが多かった。一方、周辺住民の見沼田圃への愛着が強く、今後の調整が難しくなっている。

見沼田圃では、畑地化により用水の余剰水がたたにもかかわらず、水利権は従来そのまま、水を無駄に流失している状態にある。現在、見沼代用水では上水道用水への転用事業が行われている。農業用水はすでに独自で運営していくのは難しい。農業用水も都市用水の援助を受けながら、互いに競合していく時代になったようである。しかし、農業用水側の水利権の確執が大きく、転用には障害が多々あり、大幅な転用がしにくいようだ。

町田市における住宅地形成

石 黒 洋 子

1 研究の目的と方法

大都市東京への人口、諸機能の著しい集中により、過密化が生じ、その反作用として、近郊農村地域に著しい都市化をもたらした。町田市もその急激な都市化にみまわれた都市の1つであった。

本研究では、急激な都市化に伴い、町田市において住宅地域がどのように形成されてきたのか、その形成過程を町田市全体でみると共に、特にその中から高級住宅地を取り上げて、その形成について考察していくことにする。

研究の方法としては、文献調査、統計調査、聞

きとり調査等を行い、その結果を分析、考察する。

2 要旨

昭和30年代前半まで町田市は緑に囲まれた近郊農村であったが、市制施行・首都圏整備法による市街地開発区域指定に伴い、急激な都市化にみまわれた。その都市化は、町田市の地理的な位置上東京西郊の中での都市化であると同時に、東京南郊つまり神奈川県都市化とも密接な関わりを持っていた。

町田市では急激な都市化に伴い、人口が急増し

た。この人口急増は、大量に人口を収容する住宅団地の開発によるものであった。町田市における住宅地は主に、この住宅団地開発により形成されたのである。住宅団地開発は昭和30年代から始まり、昭和40年代前半でピークを迎えた。だが、オイルショックの影響や急激な住宅開発に対する見直しから、昭和40年代後半以降、停滞している。また、開発地域についてみると、初期は相模原台地上であったが、しだいに多摩丘陵へと移動し、現在は、北部丘陵地帯が中心となっている。丘陵地帯での住宅団地開発は、ほとんどが生活基盤が整備されないまま行われたため、市民生活に様々な問題を引き起こした。

こうした住宅団地開発、またそれに伴う個別的な住宅開発により、市内には、おおむね4つに類型できる住宅地域が形成されていった。最も市街化が進み、商業機能が集中している住商混在地域、公社・公団などが開発した大型の集合住宅が建ち並び、周辺の住宅地とは異質な性格を持つ大型団地地域、そして住商混在地域や大型団地地域の影響を受け、スプロール状の住宅開発が行われた一般住宅地域が形成されるなかで、住環境が良好で、居住水準が高い良好住宅地域も形成された。

良好住宅地域のなかでも、居住水準・住環境ともに特に秀れた高級住宅地といえる所は、町田市においては、玉川学園とつくし野である。

高級住宅地形成の要因を挙げてみると、玉川学園では、学園町として発展し、文教地区に指定されたことが、そして、つくし野では、東急の多摩田園都市の一環として計画的な都市づくりがなされたことが、考えられる。

つくし野地区は、ちょうど町田市内で急激な住宅団地開発に対する見直しがされ始めた時期に、基盤整備がされ開発された住宅地である。この地区は、東急の所有地が多くを占めていたため、一戸建ての家が統一的に建てられた。また、それらの住宅の水準は高いものであった。しかし、つくし野地区のなかでも、地元地主の所有地が多く残っているところでは、アパート・マンションなどが建てられ、また居住水準の低い住宅が供給されている。

最近では、こうした地元地主によるスプロール状の、そして土地を細分化した住宅地開発が増加しているが、それによって、せっかく区画整理により基盤整備がされながらも良好な住環境を保てない状態になっている。この対策としては、基盤整備を行うだけでなく、地区計画などを積極的に取り入れ、無秩序な住宅開発を防ぐことが必要である。

また、民間による良好な住宅地開発はどうしても地価高騰を招くので、公的主体による良好な住宅地開発が今後望まれる。

三崎町の生活基盤

上 出 よし江

まず本論の目的は、愛媛県西宇和郡三崎町の生活基盤を明らかにすることだ。それは、三崎町が山がちで細長い半島の岬、という極めて生活しにくいと思われる所にあって、5,724人（昭和60年）という人口規模を持つことに、疑問を感じたからだ。

上記のような目的のために、まず自然条件と歴史的背景から、三崎町の成立過程を明らかにした。

次に三崎町成立（三崎・神松名両村の合併）後の人口の変化を、産業、生活の変化との関連において検討した。

以下に結論を書く。

三崎町は愛媛県の西南端にある。細長い半島の岬にあることは先に述べたが、三崎町自身も、東西に細長い形をしている。

集落の立地、歴史、主産業、人口変化、生活基盤を知る上で必要な、あらゆる点において、三崎町内の四つの地区（西地区、中央地区、東北地区、東南地区）は性格を異にしている。その境界が常に一致することからも、各地区が歴史的一体性を持つことから、この四地区を単位に三崎町の生活基盤を明らかにしていくことには、妥当性があると思われる。そこで、ここでは、各地区ごとの生活基盤を明らかにし、最後に三崎町の生活